

保育専門委員会（第2回、1月7日開催）における主な意見（未定稿）

【乳児、3歳未満児保育の意義・重要性等】

○乳児期は、環境設定や保育士との関わりの中で子どもの愛着が形成され、様々な活動を経験して自我が形成されていくという極めて重要な時期であり、乳児期からの保育の積み重ねや連続性が重要。

○乳児期の遊びは、学びの芽生えにつながるものであり、子ども自身が学びを進展させていくことを大事にしながら、カリキュラムや保育課程等を構築していくことが必要。小学校以降の教育の準備段階ではなく、生涯の学びの出発点、人生の基礎・土台と捉えて、長期的な視野を持った援助が必要。

○乳児・3歳未満児の保育の内容を充実させるためには、独立した章を設けることや、乳児・3歳未満の保育の意義についてより明確に示すことなども考えられる。

○現行の指針では、応答性に努める等の記載があるが、愛着関係や自己肯定感などについての記載を盛り込むことで、何のための応答性なのかが明確になり、保育士が関わりを持つ際の目的意識等にもつながると考える。

○子どもたちの主体性をはぐくむことが大切であるが、そのためには保育者の応答性も大変重要。子どもたちの主体性が育ってくると、その分保育者は大変になるということも理解が必要。

○乳児・3歳未満児の保育における愛着や応答性の重要性が認識されている一方で、1歳の頃から明確に現れる自己主張という行為が、一部の保護者や保育者からは、反抗と受け止められている現状もある。子ども主体の、子どもに寄り添う保育を行うことが重要。

【乳児保育、3歳未満児の保育（教育）】

○自己が形成される3歳前後を境に保育内容は変わっていくが、3歳未満の経験が切れないうつながっていくことも意識しながら、3歳未満の教育での「領域」を検討することが必要。

○3歳未満では5領域にはこだわらず、これまでの保育所での保育の歴史や実績を元に、検討していけばよいのではないかと。ただし、2歳児については、5領域をある程度意識するなど、整合性を考えることも必要。

○「発達」に関して、現行では大きくくりになっているが、9か月、6か月、3歳前後など、発達の質が変わる節目を踏まえてもいいのではないか。一方、細かく区切って、到達目標を設けるようなことは望ましくない。

○乳児保育の実践においては、子どもたちの習慣をどのように形成していくかということに日々努力している。習慣形成の部分が乳児期の保育の核となると考えられる。

【乳児保育、3歳未満児の保育（養護）】

○乳児期には、あらゆる微細な運動や精神性、情緒性などが全体として統合して育ってくる。養護についても、領域ではなく生活活動全般にかかわる、根幹をなすものとして理解すべき。

○教育と学びを結びつける、人の成長を助けるという視点からも養護は重要。年齢が低い段階では、身体的な行為を伴った養護が重要だが、年齢が上がっても、気を遣う、見守るなどの見えない形での養護がある。

○養護と位置づけられる保育士の援助やかかわりは、人柄と情熱でやっているように誤解されがちだが、それだけではなく、身につけた専門性に基づいて行われているということが認識されることが必要。

○保育の質は、保育士と子どもの実際のやりとり、相互作用、コミュニケーションの質だということをしっかりと押さえた上で、だから養護が特に重要であると、その意義を明確にすることが必要。

○第3章の保育の内容の中で、養護に関する記載が5領域と並べられると、養護が第6の領域であるような印象につながるおそれがある。養護が基盤であることを強調するには第1章総則の方に位置づけるほうがよい。

○幼稚園も含め、すべての教育活動には養護の視点があり、全てを包み込むような、底辺にあるようなものとして養護がある。5領域と並べるようなものではなく、総則の中に入れていくことが適当ではないか。

【乳児保育、3歳未満児の保育（その他）】

○保育所保育は、クラス運営を前提にした集団保育であることを、指針でも意識することが必要。家庭養育との段差を受入側が意識することや、どのように働きかけていくかなどを細やかに示していくことも重要。

○短期大学で学んだ学生等は、高校卒業後2年で現場に立つことになる。応答性や養護について、具体的な保育の中での事例などが、解説書等で、より分かりやすく示されるとありがたい。

○3歳未満児の保育において、家庭との連携による生活の連続性を確保するという点を明記してはどうか。現行の指針では、保護者への支援が強調されているが、家庭との連携ということを前面に出した方がよい。

○乳児保育の重要性や、虐待の問題など、乳児と保護者をセットで考えていくようなことを、より厚く示していくことが必要。また、乳児期の遊びを保障するために、専門的な研究の成果も踏まえて、乳児保育の素材や教材等について、記載を充実することができないか。

○乳児・3歳未満児の保育においては、子どもたちの発達に応じた保育室等の環境設定が重要。環境を構成する教材研究や関係の研修なども必要。

○乳児保育における延長保育、長時間保育は望ましくなく、慣らし保育が極めて重要。虐待、保護者の疾病、貧困などの問題を抱える家庭環境では、情緒の安定、愛着形成等が形成される保育所の役割が重要であり、特定の大人との信頼関係を形成する担当制を重視すべき。

○0から3歳児の保育において、最も根っこにあるのは、命を守るということ。小規模保育等を含め、安全な場所が確保されるよう努力が必要であり、特に乳児の保育を考える際には、このことを重く受け止めなければならない。

○欧米での貧困問題の横断研究等では、子どもの身体発達、運動面、言語面に特に影響が強いとされている。社会経済状態が悪い家庭の子どもにとって、保育所保育の質は特に重要であり、そうした子どもの発達を保障する面もある。

【保育士の資質向上】

○NICHHDの調査は、保育士という環境が、非常に大きな意味を持っているということ。子どもの育ちにとって、保育士という存在そのものが非常に大きな環境である。

○保育所で専門的知識及び技術を持った保育士が行う保育について、指針の中でその専門性をより明確に示すことができるとよい。専門性を確立する上で、研修体系の構築なども重要。

○保育士の専門性は、養成課程だけではなく、保育士になってからも絶えず向上させていくべきもの。キャリアステージごとの保育者の研修の在り方や保育所の研修制度についても検討が必要。

○保育をリードしていく施設長や主任保育士などの管理的な立場の者のリーダーシップが、実際の保育には非常に大きな影響を及ぼすので、保育士、施設長の役割など必要な事項は指針でも明記すべき。

【その他】

○議論の中では、指針に盛り込みたい事項が数多く出てくるが、現行の指針を検討した際の大綱化の議論は尊重すべき。指針として残す、根幹のものを絞り込む作業が必要。

○保育の内容とともに、運営の在り方なども含まれている保育指針を大綱化することには困難もあるが、本当に大事なことを大綱化し、明確に書くとともに、解説書の方できめ細かい配慮事項を示していくことが必要。

○保育所保育指針の3歳未満の部分は、認定こども園の教育・保育要領へも引き継がれるべきものであるが、分離して書かれている事項が多く、記述が読みづらい構造になっている。養護と教育の一体提起提供という定義にもそぐわないのではないか。

○小規模保育など、3歳の時点でかかわりが切れるような仕組みが出てくる中で、3歳未満と3歳以上の保育の関係性、連続性をどのように図っていくかなどについても検討が必要。